

これで攻略! 共通テスト 英語リスニング対策

Contents

理論編

文字の文章と音声の文章
リスニングに必要なこと

- 1 英語の音に慣れる
- 2 話し手のペースで解釈する

文法にこだわらない?
リスニング≠リーディング

実践編

原因別リスニング対策

- 1 英文そのものが十分に理解できていない
- 2 英語の音に慣れていない
- 3 放送される英文の速さについていけない
- 4 設問に適切に答えられない

2種類のGSLの使い方
聴く時は、とにかく音声に集中

来 年受験を迎える皆さんには二つの大きな試練があります。

一つは、去年の今頃はだれも予想していなかった新型コロナウイルス感染症による社会全体の混乱です。緊急事態宣言により、だれもが長期の自宅待機を余儀なくされ、思い描いていたような勉強をすることができなかった人も多いことでしょう。そしてもう一つが、「大学入試センター試験」から「大学入学共通テスト」(以下「共通テスト」)への移行です。英語の場合、「筆記」+「リスニング」から「リーディング」+「リスニング」という編成に変わります。リスニングの配点比率は各大学で定めますが、センター試験よりリスニングの比重が高くなる傾向があり、このことに不安を抱える人は少なくないと思います(東京大学ではセンター試験のリスニングを利用していませんでしたが、共通テストはリーディング:リスニング=7:3の比率で利用することになります。京都大学や東京医科歯科大学では4:1→3:1、東京工業大学では4:1→1:1のように変化します。大学毎に状況が異なりますので、志望校については各自調べておきましょう)。

共通テストのリスニングにどのように備えるべきか、大学受験グノーブル英語科の考えを一言で言うと「グノーブルでの普通の英語学習を継続して、英語力全体を鍛える」ということです。今回の記事では、なぜそうすべきなのか、グノーブルでの「普通の英語学習」とはどのようなものか、ということについてお話ししたいと思います。

前半の「理論編」では、英語という言葉の中におけるリスニングの位置づけ、そしてリスニングに必要なものは何かを説明します。後半の「実践編」では、その理論を踏まえ、普段どのような学習をすべきなのかを具体的に説明します。

理論編

英語や日本語に限らず、およそ言語というものは文、そして文の集まりである文章を使って情報交換や意思疎通を図るための手段です。リーディングで扱われるのもリスニングで扱われるのも文章です。ではその2つは何が違うのか、基本的なところから考えてみましょう。

文字の文章と音声の文章

リーディングとリスニングの違いは媒体、つまり、どのような手段で皆さんにその文章が提示されるのかという1点です。リーディングの文章は、紙や画面上に表示される「文字の文章」です。他方、リスニングの文章は、直接だれかの口から、あるいは

スピーカーやイヤホンから流れてくる「音声の文章」です。

リスニングに必要なこと

1 英語の音に慣れる

教育現場では、「音声の文章」を扱うリスニングよりも、「文字の文章」を扱うリーディングの方に重きが置かれ一学年が上がるほどこの傾向は強いと思われる。結果的にリスニングよりリーディングの理解度・定着度が高くなり、多くの方が「見たらわかるけど、聴いたらわからない」という悩みを抱えています。したがって、リスニングを得意にするために皆さんが行うべきことの1つは、英語の音に慣れる、と

いうことになります。

受験生の中には、「自分はこれまで音声を使った学習をしておこなった、これまで習った単語は何百、何千とあるのにその音声をいちいち確認するのは時間的に不可能だ」という気持ちになる人もいます。もし、英語の音声は何百種類もあって、一つ一つの単語の発音を別個に覚えなければいけないのだとしたら、相当な時間がかかるでしょう。けれども、英語の音は母音と子音を合わせても40種類ほどしかありません。また、特に気をつけるべき音、つまり、文字を見て頭の中で思い描く音と実際の音が異なっているものは、種類が限られていて、しかも多くの単語に共通で含まれています。



たとえば、**drink**の発音は「ドリンク」ではありません。**d**と**r**が連続するところが独特の音になり、カタカナ表記では表せない発音です(カタカナは日本語を表記するために考案されたものであり、まったく異なった音韻体系を持つ英語音を表記するのはそもそも不可能です。発音の不明な単語は電子辞書などを使って耳で確認するのが一番確実です)。**dr**という音に慣れていない人は当然**drink**という単語が聴き取れないということになります。**drink**のような基本語も聴き取れないなんて致命的に感じられるかもしれません。けれども、**drink**の発音にしっかり慣れさえすれば、**dr**を含む他の単語の音もわかるようになります。**dry, dream, drama, draw**など**dr**で始まる単語は多数ありますし、**address, hindrance**など語中に**dr**を含むものもあります。また、**dr**の音に慣れると、これとよく似た**tr**の音にもすぐに慣れて、**try, tree, train, attract, introduce**などが楽に聴き取れるようになります。このように、リスニングのカギとなる音は、多くの単語で共有されています。

リスニングに必要なこと

2 話し手のペースで解釈する

文字と音声という異なる媒体は、その性質に大きな違いがあります。文字はそこに残り、音声はその場限りで消えてしまう、という違いです。受け手の立場からこの違いを捉え、リーディングの文章は時間をかけて、自分のペースで読み解いていくことができるのに対して、リスニングの文章は、話し手のペースで解釈しなければならない、ということになります。話し手のペースで解釈するということは、単語の連続である文章を、日本語に置き換えることなく、「聞こえてくる順番に」「聞こえてくるのと同じ速さで」解釈していかなければならないということです。

「聞こえてくる順番に」解釈するために必要なものは語彙力と文法力です。文は表面的には単語の連続ですが、いくつかのかたまりに分かれています、それぞれのかたまり

りがさらに小さなかたまりに分かれていく、という重層的な構造をしています。

たとえば

Our teacher asked us to repeat the sentence.

という文は、まず **[Our teacher]** + **[asked us to repeat the sentence]** という主部のかたまりと述部のかたまりに分かれます。述部は **[asked]** + **[us]** + **[to repeat the sentence]** に、**to repeat the sentence** は **[to]** + **[repeat the sentence]** に、**repeat the sentence** は **[repeat]** + **[the sentence]** に分かれます。そして、主部の **our teacher** と最後の **the sentence** はそれぞれ **[our]** + **[teacher]**, **[the]** + **[sentence]** のように分かれます。

このように、文の本質は「単語」の連続ではなく、「意味を持つ単語のかたまり」の連続であり、それを把握する力こそが文法力なのです。聴き手に文法力がなければ、聴こえてくる文は「単語」の連続となり、断片的な意味の羅列になってしまいます。先ほどの英文 (**Our teacher asked us to repeat the sentence.**) を単語の連続として捉え、**「私たち、先生、尋ねた、私たち、へ、繰り返す、その、文」という「解釈」**になります(もはや「解釈」とは言えません)。他方、「意味のかたまり」の連続として捉え、**「私たちの先生は」「求めた」「私たちに」「その文を繰り返すように」と**なります。和訳の答案であれば少し手直しが必要かもしれませんが、英文の意味を捉えるという点では、これで十分です。

文法にこだわらない?

「リスニング力を鍛えるには、とにかく英語の音にたくさん触れることが必要であり、文法にこだわってはいけません」と言われることがあります、これを「リスニングに文法の知識は不要」という意味に解釈するのは間違いです。今、述べたように、文は「単語」の連続ではなく、「単語のかたまり」の連続です。そして、単語をかたまりとして捉える力が文法力です。

英語の「音」に慣れ親しむためには、英語の音を繰り返し聴くことは欠かせません。また、聴こえてくる順番で意味を捉えていくための訓練として、音声教材を繰り返し聴くことは非常に効果的です。そのような訓練では、最初は文法的な構造を確認し、単語のかたまりを意識しながら始めていきますが、練習を進めていくにつれて文

法とか単語のかたまりというものを意識せずに、英語がそのまま頭の中に入ってくるようになります。これが、「文法にこだわることなく、話し手と同じペースで英語を解釈できる」状態です。文法にこだわらないということは、文法を軽視するということとは正反対です。頭でしっかりと理解したものを、練習を繰り返して徹底的に身体に覚えこませ、結果的に文法を意識しなくても単語のかたまりを正しく捉えられる状態、これが「文法にこだわらない」ということです。

リスニング≒リーディング

ここまでの説明から明らかなように、リスニングの力はその大部分がリーディングの力です。リスニングでは音そのものに慣れなければならないという側面がありますが、それ以外では、リーディングとまったく同じ力が求められます。先ほど、文字の文章は読み手のペースで解釈できると言いましたが、もちろん持ち時間が無限にあるわけではありません。試験であれば制限時間の中でそれなりの語数の文章を読み、なおかつ設問にも答えなければいけません。いちいち文法解析をしたり、日本語に置き換えたり、返り読みをしながら読んでいたのでは、文章の半分も読み進めることができません。したがって、リーディングにおいても、書かれている順番に、音読するのと同じ速さで意味を捉えていくことが求められます。そして、そのために必要なのは語彙力と文法力です。

ところで、皆さんは、これまでリーディングとリスニングのどちらに力を入れてきたでしょうか。大部分の人はリーディング中心の勉強をしてきたと思います。そうだとしたら、これまで進めてきたリーディングの勉強方法を見直し、調整することで、リスニング力の向上を図るのが最も効果的な学習ということになります。さらに、リスニング力向上につながる勉強方法は、同時にリーディング力のさらなる向上にもつながっていきます。リーディングの勉強とリスニングの勉強を具体的にどうつないでいけばよいか、後半ではその実践方法を説明します。



実践編

ここからは、いま述べてきた理論に基づいて、具体的に何にどう取り組めばよいかを説明します。

原因別リスニング対策

通常授業で英語を受講している受験生は、グノーブルの音声教材が手元にあるはず。とりあえず一番最近の授業で取り扱った読解の要約問題の音声や、作文・文法の授業のリスニングの音声を聴いてみてください。しっかりと聴き取れたでしょうか。もし、うまく聴けない、という場合は以下の4つのうちのどれか、あるいはその組み合わせが原因です。それぞれの原因には、それぞれに対策があります。

1 英文そのものが十分に理解できていない

文章全体あるいは肝心なところがうまく聴き取れていないと感じたら、スクリプトを見てみましょう。スクリプトを読んでもやはり内容が把握できないのであれば、語彙力・文法力が不足しているということになります。

対策

不明な単語の意味を調べて、単語のかたまりを意識しながら、納得がいくまでスクリプトの英文を読み直してください。しっかりと理解できたら、音声を聴き直しましょう。最初に聴いた時よりも、うんとよく頭に入ってきて、心地よさを覚えると思います。こういう心地よさの経験は自信につながり、前向きに取り組むための原動力となりますから、大切にしてください。

2 英語の音に慣れていない

音声で聴いた時にはよくわからなかったが、スクリプトを読めばよくわかるという場合、英語の音に慣れていないことが原因の一つです(もう一つの原因は次の3で説明します)。うまく聴き取れない単語やフレーズ、なんとなく耳にしっかりと響かない音があれば、それこそが皆さんの克服すべき苦手な音ということになります。

対策

うまく聴き取れないものは、まずどういう単語・どういうフレーズだったのかを、スクリプトで確認しましょう。それから、その部分にしっかり耳を傾けてくだ

さい。カタカナ発音やこれまでの思い込みを忘れて、「音」そのものに集中します。何度か聴いて音の姿がはっきりと感じられるようになったら、今度はそれを聞こえてきたまま真似てみます。最初はうまくできないかもしれませんが、何度か繰り返すうちに同じような音が出せるようになります。「出せた!」と思ったら、口や唇の形、舌の位置、そして音の響き、それらを意識しながらさらに何度か発音してみましょう。そして、今度は音声を聴きながら、同じスピード、同じイントネーション(音の抑揚)、同じリズム(音の長短や音の強弱)と一緒に発音してみてください。さっきまで苦手だったところを、ナレーターと同じように発音できれば、皆さんはその音を克服したことになります。きちんと発音できる音はしっかりと聴き取れるはず。です。

最初が一番難しい

このようにして、「聴き取れない音」を「発音できる音」に変える取り組みを毎日少しずつでも積み重ねていけば、1か月後には音を聴く力、そして音読する力は飛躍的に向上しています。これまであまり音声教材を利用してこなかった人にとっては、思うように発音できないことが多くて落ち込むかもしれません。でもあきらめないでください。一つでもうまく真似ることができれば、それは大きな一歩となります。そしてそれをきっかけとして次につなげていくことができます。語学は累積的、つまり積み重ねです。一つのことが身につけば、それを土台として次の何かを身につけるのは少し楽になります。

先ほど例にあげましたが、**drink**の**dr**がうまく発音できるようになれば、**tree**や**try**の**tr**という音を身につけるのは簡単です。同じように、**better**の**t**の発音のコツがつかめれば、**put it on**や**not at all**の**t**の発音も身につきます。**put it ón**のアクセントが身につけば、**cheer him úp**のアクセントもわかります。**cheer him up**で**h**が消えることがわかれば、**better**の**t**の発音のコツと組み合わせ、**let her go**も聴き取れるようになります。このように、マスターした音を少しずつ増やしていくことで、発音できる単語は雪だるま式に増えていきます。



3 放送される英文の速さについていけない

スクリプトを見ればよくわかるが、放送される英文についていけないという場合は、聴こえた通りに前から意味をとっていき読み方をしていない、あるいは前から読んではいらぬがまだ練習不足であることが原因です。

対策

2と重複する部分もありますが、英文を流しながら、そしてスクリプトを見ながら、ナレーターと一緒に音読を試みましょう。同じスピード、同じイントネーション、同じリズムと一緒に発音してみてください。2は音声重視の対策でしたが、ここでは解釈重視の対策です。どういうことを述べているかを頭の中でイメージしながら音読をしてください。決して日本語に置き換えようとははいけません。ナレーターと同じような読み方ができるようになったら、今度は一人で音読をしてください。音読をする時は、自分がその文章を書いた本人になったつもりで、目の前にいる人に向かって、その文章の内容をプレゼンする気持ちで読むことがポイントです。疑似的に発信者となることで、意味のかたまりをよりはっきりと意識することができるようになります。ちなみに、この疑似的発信の訓練を積み重ねると、ライティングやスピーキングのスキル向上にもつながっていきます。もちろん、語彙力・文法力も鍛えられます。

4 設問に適切に答えられない

英文はだいたい聴き取れているし、話されている内容も把握できている、けれども答え合わせをしたら間違っている、そういう場合は、設問の把握が不十分であることが原因です。

対策

何を問われているかをしっかりと把握する、という点につきます。出題の形式を知るという点では、直近の過去問を解くことが有効な方法の1つですが、来年から始まる共通テストには残念ながら過去問はありません。ただ、大学入試センターでは「試行調査(プレテスト)」を実施していて、問題や解答を公開していますので、これが一種の「過去

問」ということになります。

https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/pre-test_h30_1111.html

まだ取り組んでいない人は、どのような試験なのかを経験しておくのがよいでしょう。取り組む際は、問題冊子の冒頭にある指示をよく確認し、30分間の音声そのまま流して解答します。巻き戻しや早送りをせずに、本番のつもりで取り組みましょう。

もちろん、あくまで「試行調査」であり、必ずしもその通りの出題になるとは限りません。試験会場では「何にどのように答えるのか」「どのように放送されるのか」をあらかじめ確認する必要があります。試行調査の出題形式を事前に把握しておけば、「ここが試行調査と違っていい」と明確に意識できると思います。

過去問に取り組む意味

グノーブルの通常授業で英語を受講されている受験生にはお話ししていることですが、過去問は英語力を向上させるために解くものではありません。問題の傾向を知ること、そして思ったように正解できなかった場合はどこに原因があるのか自己分析をすること、この2点が過去問に取り組む目的です。皆さんの英語力が伸びるのは、演習・添削→解説→復習という日々のサイクルを通してです。とりわけ、音声の聴き込みや音読を中心とした復習にどれだけ注力できるかがカギとなります。リスニングも例外ではなく、過去問（試行調査）や模擬試験をこなせば、その分だけリスニング力が向上するというわけではありません。日々の学習サイクルの中でこそ、語彙力・文法力・読解力・作文力が鍛えられ、それがリスニングの力にもなっていくのだということを理解してください。

2種類のGSLの使い方

グノーブルの英語の授業では、読解の授業にも作文・文法の授業にも音声教材（GSL）が用意されていますが、それぞれの役割は異なります。読解のGSLは、授業内の演習→添削→解説を通じてしっかり理解できた英文を、耳からインプットし、さらに音読につなげることで、返り読みや日本語への置き換えをすることなく、語順のまま意味をとる訓練をするためのものです。

これによってリーディング力だけでなく、リスニング力も鍛えられるということは既に述べた通りです。リーディング力・リスニング力の精度を少しでも高めていくための教材と言ってよいでしょう。

他方、作文・文法の授業で扱うGSL（リスニング問題）は、初めて聴く英文をどの程度把握できるか、どのくらい設問に正解できるか、という力試しを行ってもらうためのものです。1語1語を完璧に聴き取ることよりも、問題に正解することを第一に考えて取り組んでください。また、うまく解けなかった場合に、どこに原因があるのかを自己分析してもらうための演習でもあります。内容が難しかった、知らない単語がいくつもあった、速さについていけなかった、聴き取れない箇所でも思考が停止してしまった、何を答えればよいかを把握していなかった、など、聴き取れない原因、正解できない原因は様々です。それを確認する機会だと考えてください。

皆さんは英語力を伸ばしていく途上にあるわけですから、演習でいつもいい点がとれるとは限りません。知らないことが次から次へと出てくることはむしろ普通のことです。大事なことは、うまくいかない時に、原因を探り、どうすればうまくいくか対処法を考えることです。そのような前向きに客観的に自分を見る力を通して、皆さんは成長していくのです。

聴く時は、とにかく音声に集中

最後に、実際にリスニング問題に取り組む際に気をつけてもらいたい点をお話したいと思います。リスニング問題に取り組む際は、何よりも音声に集中することが肝心です。音声の流れの前に設問に目を通し、何を答えるべきか、どのような情報を聴き取るべきか、などを確認して、英文が放送されたら音声に集中します。「自分はリスニングが得意ではないから、メモを取りながら聴かないといけない」と考える人もいるかもしれませんが、むしろ逆効果です。メモを取ると、どうしても注意力の一部が音声から離れてしまい、大事な情報を聴き取らしてしまうかもしれません。きちんと聴き取ろうとしてメモを取ることが、かえってリスニングの妨げになりかねないのです。

また聞こえてきた英文を頭の中で日本語に置き換えようとしてはいけません。日ごろから訓練している語順のまま前から

意味をとっていき読み方をリスニングでも実践しましょう。

共通テストのリスニングでは、問題によって、2回読みと1回読みがあります。授業内のリスニング演習では2回放送することが多いのですが、1回目の放送の際に1回読みの問題のつもりで取り組んでみると、より集中力を高めることができます。

なお、1回読みの場合、大切な1語が聴き取れなかったらどうしよう、という不安もあるかもしれません。けれども、大切な情報は違った表現で繰り返されるものなので、さほど心配することはありません。大学入試センターが発表している問題作成方針の中にも、「読み上げ回数については、（中略）1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する」と明記されています。1回読みで注意すべきことは、むしろ、何を答えればよいのかをしっかりと把握した上で集中して聴くということです。放送を聴いた後に初めて設問を読むのでは手遅れです。このようなことは普段のリスニング演習でも意識しておきたいところです。そして、リスニング以外の問題演習においても、「何を、どのように答えるべきか」を常に意識して取り組む姿勢を忘れないでください。

最後に

この記事を読んで、共通テストのリスニング問題にどう向き合えばよいか、ヒントは得られたでしょうか。未知のものに対して不安な気持ちになるのは当たり前のことです。皆さん新型コロナウイルスは怖いですが、手洗いをして、マスクをして、密を避けて、十分に睡眠をとるなど、できることはいくつかあって、それを淡々と続けていくことが、結局は一番の対策となりそうです。

初めての共通テストも不安です。けれども、相手は未知のウイルスではなく、英語の試験です。問われるのは英語の力です。特別なことをするのではなく、当たり前のことを行う、一演習や宿題に集中して取り組み、解説をしっかりと聴き、着実に復習を行う、一これらを淡々とこなしながら英語力を高めることが、共通テスト対策になり、また大学別の入試対策にもなっていきます。このことを心にとどめて、日々の学習に取り組んでください。